

真木

第 184 号

〒261-0004
千葉市美浜区高洲
1-14-9-503
田所節子方
千葉県俳句作家協会
事務局
TEL 043-277-1056

〒299-1143
君津市君津台 2-8-4
石井紀美子方
「真木」編集部
TEL 0439-52-6254

目 次

巻頭言 常に新鮮な気持で……………	会長 能村研三……………	1
第三回千葉県俳句大賞決まる……………	……………	2
大賞受賞句集 下鉢清子 自選二十句……………	……………	3
第三回千葉県俳句大賞贈賞式・新春交流会……………	……………	6
第三回千葉県俳句大賞受賞者のことば……………	……………	8
千葉県俳壇ニュース……………	……………	9
ひろば、結社賞、新入会員一句……………	……………	11
会員著書紹介……………	……………	12
受贈誌より、事務局日誌……………	……………	13

巻頭言

常に新鮮な 気持で

会長 能村 研 三



降る雪や明治は遠くなりけり

平成三十年を迎えました。この句は中村草田男が詠んだ有名な句ですが、昭和生まれの私も「昭和」「平成」と時代を重ね、次の年号の時代を迎えようとしています。天皇陛下が生前退位の意向を明らかにされ、平成の世も残りわずかとなってきて、時代の変遷というものを肌身で感じるようになってきました。俳句を詠む方の年齢も平均年齢が七十五歳を越えて、いよいよ俳句の世界でも高齢化の時代になってきたようです。

昨年二月には、千葉県俳句作家協会の設立四十五周年の祝賀会が県内の関係者及び俳句総合誌の編集長をご来賓にお招きして開催され多くの方々からお励ましの言葉をいただきました。この節目を大きなステップとして、さらに当協会が発展して県内の俳壇活動を活性化すると共に千葉県の文化振興の発展にも尽力していきたいと考えておりますので、皆様には今まで以上のご協力ご支援をお願いいたします。

当協会では、県内俳壇の資質向上と県民文化の

振興に寄与するため、一昨年より「千葉県俳句大賞」を設けましたが、本年は第三回目となり、下鉢清子さんの句集『貝母亭記・五百句』が大賞に輝きました。今回も十二編を越える句集が対象となりましたがあらためて、千葉県俳句作家の質の高さ層の厚さに驚くものがあります。

本県の俳句人口は全国的に見てもベスト5に入るものと思われませんが、温暖な気候と豊かな海と大地に恵まれ、俳句を詠む環境に最も恵まれていると言えますが、地形が広く県都千葉市に一同に集まるのは中々困難であります。

ところで関西地区では、かなり以前から俳人協会、現代俳句協会、日本伝統俳句協会の三つの協会の枠を越えて、一つになって様々な活動が行われています。最近俳壇の方々から、「千葉県俳壇は関西のようにまとまっていて良いですね」と羨ましがられることがあります。多くの方々から千葉県俳壇が注目されていることはうれしい限りです。

こうしたことを踏まえて、千葉県全体の俳句作家が集える組織作りを本年も目指していきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

第3回千葉県俳句大賞決まる

千葉県俳句作家協会では、この度第三回目の「千葉県俳句大賞」「準賞」さらに「奨励賞」を決定した。本賞は千葉県内に在任し、平成二十八年十二月一日より二十九年十一月三十日まで刊行した句集の中から推薦されたものを協会の選考委員会の議を経て決定された。今回は候補作品十二編各自二十句（既に送付済）から選考委員が予め三編を選出して平成二十九年十二月十六日（土）午後五時より、市川市の『沖』事務所が集まった。作品は自選・他薦を問わず、また対象者が当協会に加盟の有無に関わらず、優れた作品を選ぶことで議論を重ねた。何れも実力のある作品が揃っていたが、審査の結果は左記の通りである。

◎第三回 千葉県俳句大賞

句集『貝母亭記・五百句』 下鉢 清子
ウエップ (平成二十九年八月刊)

◎第三回 千葉県俳句大賞 準賞

句集『星 狩』 清水 伶

本阿弥書店 (平成二十九年三月刊)

◎第三回 千葉県俳句大賞 奨励賞

句集『初 暦』 荻原透葉子

文學の森 (平成二十九年五月刊)

それぞれ結社も、作風も異なるが、本協会では、現代俳句協会・俳人協会・伝統俳句協会と三協会に所属する選考委員が忌憚のない意見を述べ合い合意の結論を得たものである。

今後も大局的な見地から、広く県内から全国に羽ばたく俳人の功績を顕彰したいと思つてこの賞を設けている。この趣旨に添つて来期も奮つて応募して頂きたい。

選考委員 三枝 かずを

選考委員

能村 研三
増成 栗人
三枝 かずを
塩野谷 仁
秋尾 敏
村上 喜代子
すずき 巴里
(俳句大賞事務局)



俳句大賞審査会

大賞



句集『貝母亭記・五百句』

下 鉢 清 子 自選二十句

柏市在住。「清の會」主宰・俳人協会千葉支部・連句協会千葉支部の両顧問・俳人協会名誉会員、句集『下鉢清子選集』『霜の道』『荒おこし』『四序』『樹蔭』『遊行の靴』『ゆつくりと』『水の奥』他・論文集『沼辺燦燦』大正十二年群馬県生れ。

蜥蜴にも浮足立つといふ走り

筑波嶺を青垣として稲の花

しんしんと海霧（じり）の底より濤の湧き

喉（のど）えがらつばいくるりと絹マフラー

水音も鯖鮎（しん）の瀬となりけり

海が見ゆバックバックに尺蠖虫

山国の刻はゆるやか夕桜

踏み切りが鳴るびしよ濡れの芥子坊主

祖谷（い）時雨芋田楽を回し焼く

秋燕の空となりたり葛西橋

初鶯母の縫目を解きをれば

立冬やガスに点火をすればポポ

さつくりとパイの皮噛み四月来る

沈丁花袋小路はBarに尽き

鷹育つ森の際まで田を植うる

秋の陽の鋼の匂ひ山羊に髭

雲近くなるまで登り梅の花

さつきから気になつてゐる冬の蠅

わが街と言へるほど住み灸花

父と子の夕凧ひとつ三番瀬

準賞



句集『星狩』

清水 伶 自選二十句

市原市在住。「遊牧」同人・現代俳句協会会員・千葉県現代俳句協会幹事、句集『指銃』共著『現代俳句を歩く』『現代俳句を語る』、昭和二十三年岡山県生れ。

幾万の蝶を翔たせて夏の空
抽斗のなか紅梅の坂がある
胎生の無数の濁り白もくれん
深層の水買いにゆく夕さくら
繻帯を巻く鼻になりたくて
唇のしずかな水位羊歯ひらく
母死後のピアノに匿す秋螢
うつうつと兎小屋あり木々芽吹く
かくれんぼ蝶の白さを残したる
亡父と母交り合うとき蝨斯
死をねむる母は白花さるすべり
讚美歌を閉じ冬蝶を漂わす
くちびるに荒蝶ひとつ夢始
星狩に行つたきりなり縞鼻
裸婦ともなれず寒椿ともなれず
おぼろ夜の紅絹一反を思いけり
蝶生るこの一頭はわたくしごと
黒板の数式野うさぎのゆくえ
永遠の合わせ鏡と寒梅と
たましいを華とおもえば霰ふる

奨励賞



句集『初曆』

荻原透葉子 自選二十句

市川市在住。「天頂」同人・「天頂賞」受賞・俳人協会会員、句集『花野』、大正七年東京都生れ。

困はれて伏姫ざくら老いにけり
花の影路地に余りて立ち上がる
青柿の落ちてはづまぬ反抗期
存へて忘れ上手に春を待つ
春寒し湯呑影ごと摺みたり
楽しくて厨讓れず春野菜
身の内の火種たしかめ冬に入る
太き息吐かせてたたむ鯉幟
気持よく泳げし手足昼寝覚
干されるて踏み出すかたち祭足袋
踊の輪入るきつかけ膝で待つ
喪の家も大き初日の中にあり
朝ざくら今日の元気は今日使ひ
梅が香や色紙はみだす梅の枝
ビル街を小さく残し鳥帰る
父の日や風呂屋にベントツ止まりて
団欒も大鍋も失せ買ふおでん
ふらここやとび出しさうな影ひいて
老骨にぽつと火がつく新走
初曆九十八歳こはれもの

第三回千葉県俳句大賞選評

大賞選評

秋尾 敏

「繪硝子」顧問、「清の會」主宰の第十句集である。著者は俳人協会千葉支部長、連句協会千葉支部長を務め、千葉県俳壇の発展に寄与。現在は公益社団法人俳人協会名誉会員。句歴は戦時中の「ぬかるみ」に始まり、戦後は「鶴」同人を経て「万雷」創刊同人となり評論賞を受賞。連句は昭和五十九年から東明雅に師事し、平成十五年に立机。長く俳句、連句の両面で蓄積してきた俳文芸への奥深い教養が、近代俳句の型にとられない自由な境地を生み出しており、多様で自在な句柄に目を奪われる。県俳壇への多大なる貢献、俳文芸への切り込みの奥深さ、作品の独自性などの点から、千葉県俳句大賞にふさわしい句集である。

準賞選評

塩野谷 仁

清水伶作品の特徴は「硬質の叙情」にある。この場合の「叙情」とは、「詩の本質としての存在感の純粹衝動」としての「叙情」のことであって、安易な心情表現の「抒情」のことではない。

たましいを華とおもえば霰ふる

清水伶氏の経歴を見ると、我々の「遊牧」に所属するまでに、岡本眸「朝」金子兜太「海程」などいづれも硬質の叙情の系譜に連なっている。つまり、俳句をかなり「詩」に近づける位置に立っているのだ、一見難解な面もあるのだが、現今の「お上手で、優しく、まことに平和な」作品が氾濫している俳句界にあつて、その流れを糺して今後を背負っていく一人に違いない。

奨励賞選評

増成 栗人

奨励賞の萩原透葉子さんは白寿を迎える作家。「初暦」はその著者の第二句集である。一冊を読みきって到底この齢とは思えぬ若々しい感性に驚かされている。句集巻末に置かれた「初暦九十八歳こはれもの」は実に素朴に現在の心境を詠いながら、紛れもなく作者の衰えざる詩「ころを覚えさせてくれる。「苛立つ日鶏頭避けて通りけり」の直情的な自己把握、「秋の水叩いて顔を洗ふかな」の身ほとりの景と一体化するフレッシュな清涼感など、とても百歳に近い作家とは思えぬ、己がロマンへと向けるやわらかな感性の発露が見えてくる。お目に掛かったことはないが、美しき老いを漲らせた句集だと改めて敬意を表したい。

第3回千葉県俳句大賞選考対象句集

番号	賞	句集名	著者	刊行年月日	刊行出版社	住所	所属結社
1		帚木	宇留野ひとみ	H28. 12. 15	東京四季出版	千葉市	鶴
2		按手(あんしゅ)	佐藤 徹	H29. 3. 10	本阿弥書店	我孫子市	若狭
3	準賞	星 狩	清水 伶	H29. 3. 31	本阿弥書店	市原市	遊牧
4	奨励賞	初 暦	萩原透葉子	H29. 5. 26	文學の森	市川市	天頂
5		朴	中村 重雄	H29. 6. 24	ふらんす堂	千葉市	いには
6		大 津	鈴木弥生子	H29. 8. 15	文學の森	野田市	天頂
7		森の所在	井上けい子	H29. 8. 26	文學の森	柏市	遊牧
8	大賞	貝母亭記・五百句	下鉢 清子	H29. 8. 30	ウエップ	柏市	繪硝子・清の會
9		詩季の風	吉野 正一	H29. 9. 7	文學の森	長生郡	原人
10		雪 螢	斉藤タカ子	H29. 9. 25	角川書店	千葉市	秋麗
11		梨 花	矢萩ゆたか	H29. 10. 20	文學の森	香取市	杉
12		銀の權	渡辺 紀子	H29. 2. 7	ふらんす堂	松戸市	夏日

第三回千葉県俳句大賞贈賞式・新春交流会

【贈賞式】

第三回千葉県俳句大賞贈賞式は、平成三十年二月十一日午後一時より開催。司会は秋尾敏理事長。能村研三会長の挨拶の後、大賞担当の村上喜代子が選考過程を説明。今回は十二冊の句集が対象。選考委員六名で審議の結果、大賞・下鉢清子、準賞・清水伶、奨励賞・荻原透葉子各氏に決定と報告。各受賞者へ賞状と花束が贈呈された。祝辞は荻原氏所属の「天頂」主宰、波戸岡旭氏。下鉢氏の句集出版元、ウエップ俳句通信の大崎氏より戴



後列左より 増成副会長・能村会長・塩野谷副会長・三枝副会長
前列左より 荻原透葉子・清水伶・下鉢清子の諸氏

く。受賞者の挨拶は祝賀会の席で、ということだったが、荻原氏はお帰りになるとのこと、ここで挨拶。九十八歳への何よりのご褒美だとその喜びを語られた。今回大賞の下鉢氏は九十四歳。両氏の驚くばかりのパワーに参加者一同、おおいに勇気づけられた。ここで来賓の六名の方を紹介。塩野谷仁副会長の閉会の言葉によって散会となった。(村上喜代子記)

【新春交流俳句会】

俳句大賞の贈賞式に引き続き、同じ会場で俳句会が開催された。司会進行は菅谷たけし理事により、穏やかな雰囲気での進む。出句は当季雑詠二句、出句総数一六八句。採点の仕方については、詳しく説明された。今回は役員、理事の十句選によって上位十位までを入賞決定とする。他に役員の特選賞も決める。披講は理事の望月さん、小野さん。明晰な披講により、作者の高らかに名の声がかつ会場にひびく。結果、十位までの句が決定、入賞者、特選句に賞品が授与された。表彰後の講評では、副会長、会長より、特選句他数句を挙げ、その良さを述べられた。会員にとっては今後の作句活動に大いに参考になるお話で、皆さん真剣な眼差しで耳を傾けて居られた。



俳句会風景

俳句会作品集

【特選句】

- 能村研三会長特選 大年の爪先立ちて見ゆるもの 高橋 健文
- 三枝かずを副会長特選 雪の夜絵本はこれで何冊目 すぎき 巴里
- 増成栗人副会長特選 鮫鯨の大きな口にある孤独 郡 香織

塩野谷仁副会長特選

星の声聞きつつ太る崖水柱

佐々木幸子

秋尾敏理事長特選

石の鳥寒三日月という翼

林 ゆみ

川合憲子副理事長特選

一羽来て春禽の日となりけり

下鉢 清子

田所節子事務局長特選

吸い込まれそうな寒九の大鏡

倉岡 けい

外丸和弘監事特選

暖かや人が通れば道できて

楠原 幹子

入賞者と代表作品

(二句合計得点、○数字は順位、一句のみ記す)

①暖かや人が通れば道できて

14点 楠原 幹子

②せせらぎか笹鳴か空碧すぎる

12点 中村 せつ

③鮫鱈の大きな口にある孤独

11点 郡 香織

④一羽来て春禽の日となりけり

9点 下鉢 清子

⑤吹雪くだけ吹雪かせ雪を眠らする

9点 すずき巴里

⑥裸木となりて万遍なき日差し

9点 岩瀬由美子

⑦水呑んで光をこぼす初雀

9点 三枝かずを

⑧心音を描くとすれば寒夕焼

9点 黒澤 雅代

⑨マスクして小さな神とすれ違う

8点 森 孝子

⑩草餅のところがころに濃きみどり

8点 中西 一江

【新春交流祝賀会】

順調に句会が終了し参会者の懇親の場となる「祝賀会」の会場へ移動する。川合憲子副理事長の爽快な司会進行で開会宣言された。秋尾敏理事長の音頭で「乾杯」の声がホール中にひびく。丸テーブルの周囲に皆さん集まり歓談。緊張がとけて、ビールや酒を酌み交わしたり、御馳走を頼張りながら大変和やかな雰囲気となる。

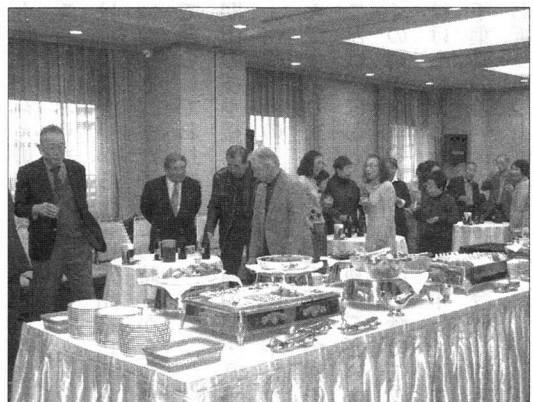
しばらくの後、俳句大賞受賞者への祝辞を、秋尾敏理事長、塩野谷仁副会長、増成栗人副会長により、俳句について、人となりについて纏々述べられた。いずれも受賞された方の特長をとらえて具体的にお話下さり、長い俳句歴と俳句への真摯な姿勢には感動。



大賞受賞の
下鉢清子氏謝辞



俳句会1位の
楠原幹子氏



祝賀会風景

又、受賞された下鉢清子さん、清水伶さんよりご挨拶をいただき、

おふたりとも、入賞させていただき感謝、恩師や句友、支えてくれた周囲の方々のお蔭とも語り俳句にまつわる秘話もご披露して下さい、笑いも出て楽しい受賞のお言葉であった。

その後、来賓の方より、三つの会派が一つにまとまるとの活動は珍しいし成果を上げていて素晴らしい。今後の活動に期待するとのご挨拶をいただき、大変励ましになった。

閉会の辞は三枝かずを副会長、建国の日にもつわる話をして下さり、三本じめで会は散会となった。

(川崎直子記・撮影松本よし彦)

**第三回 千葉県俳句大賞
受賞者のことば**

大賞 下鉢 清子

俳句作家協会より大賞のお知らせに驚きと喜び交うの今日この頃です。ご推薦下さいました選者各位に御礼申し上げます。

賞を戴くことが出来ましたのは三人の恩師・石田波郷・殿村菟絲子・東明雅三氏のお蔭です。そうして三人の師を囲む会員・ご連衆のお人柄や学ぼうする論議すべてが、私の血や肉となりました。新任教師として赴任した小学校、土曜日の半日に誘われた句会がはしり。戦時中の箝口令厳しい中、精神的に自由な時間がそこにありました。

転機は十年後、第一句集を出版した折に。超結社『女性俳句』の編集長殿村菟絲子氏より参加を誘われ、即石田波郷を師にと勧められ『鶴』会員に。スローガンの「俳句は満月季節をのぞみ蕭々又朗々たる打座即刻のうた也」の日常が続くことに。昭和六十年より、東明雅主宰『猫養会』会員となり連句を学ぶことにより、「付合い」と二句一章、余情付けに深入りすることになりました。

句歴七十五年、思うにこの間、実に恵まれた人との出会いがあつた事を感謝しつつ近頃の脳中は柿食ふや命あまさず生きよの語 波郷が占めて。「命あまさず生きよ」の難問に向き合う日々が続いていくのでしょうか。

俳句作家協会の益々の清栄と会員の皆様の充実ある日々であります様念じ御礼といたします。

準賞 清水 伶

今回、私の第二句集『星狩』に思いがけず、過分なる賞を頂けましたことは、わたくし自身へのひとつの励ましのようなでもあり、大変嬉しく思っております。

母の何気ない勧めにより、俳句を始め、その後勉強させて頂いた「朝」「海程」「遊牧」というそれぞれ別の結社、同人誌は、保守的な俳人協会系から革新的な金子兜太へと師を変えろという大変大きな振れは、異色とも思われがちですが、私にとつては、それらの師の、硬質の叙情という共通の資質、感性、詩的感覚を学び続けたという結果だと納得しております。

そして、私の専門が音楽という、全く「俳句」とは違った分野に居りましたことは、俳句を通しての様々な学びが大変新鮮で、大げさに云えば、私の人生を非常に豊かなものにしてくれました。

このような俳句の人々との出会いに感謝し、この賞を新たなスタートラインと思ひ、なお一層励んでゆきたいと思っております。

奨励賞 荻原 透葉子

この度は思いがけずこの様な立派な賞を頂戴致しまして、誠に有難く感謝申し上げます。

日々目にしたこと感じたことを飾らず句にした、だけのことですが、「天頂」主宰の波戸岡旭先生が『初暦』という形にして下さいましたことで、多くの方々目に触れ、お目にかかったことのない皆様からも温かい励ましのお手紙を戴き、九十九歳まで存え俳句を続けてまいりました喜びを噛みしめております。

私は、十代後半から千葉県市川市に住み、東京に嫁いだ後も、また子育ての時代から今日まで市川市で暮らしております。

真間山の枝垂桜・手古奈の蓮の花・八幡宮の大銀杏・白幡神社の三極の花などに癒やされつつ句を詠んでまいりましたので、千葉県の賞を戴きましたことは、ほんとうに嬉しゅうございます。

多くの御先達、句友の皆様のお蔭でここまで俳句を続けられましたことに感謝申し上げますと共に、千葉県の若い俳人の方々の今後の御活躍を心よりお祈り申し上げます。

千葉県俳壇二ニュース

日本伝統俳句協会・関東支部 第四十二回千葉部会俳句会

日時 平成二十九年十月一日(日)
会場 成田山新勝寺・信徒会館
大久保白村特選

きちきちの飛んで成田の日本晴れ 稲見 康子
懐を広げ小鳥を呼ぶ一山 梅野 ぎん
半ば巻き上げ参道の秋簾 飯塚 咲子
高濱朋子特選

生かされてなほ鳴く寺領秋の蟬 藤田 考成
小流れの音透き通る秋の水 橋本くに彦
昨日より今日の風色秋深む 駒井ゆきこ
坊城俊樹特選

秋深し同じ唄にして蜘蛛と賛 増田 善昭
天高し法鼓ずどんと胸を打つ 向阪 由紀
白帝の水あるところ身を映す 駒井ゆきこ
(千葉部会長・佳田翡翠記)

千葉県現代俳句協会秋の吟行会

小林一茶寄寓の地「流山」を巡る

千葉県現代俳句協会の秋の吟行会が、平成二十九年十月二十五日、流山市の一茶双樹記念館、近藤勇陣屋跡、閻魔堂などを吟行地に、流山市生涯学習センターで開催された。生憎の小雨であったが六十名の方が県内各地から参加された。

【二十位入賞者作品】 (二句のうち一句)

- ① 旧道は好きかと雨のきりぎりす 秋尾 敏
- ② 旅愁なお踏んでしまった団栗よ 山崎 政江
- ③ どの石も語り出す庭神のるす 市川 唯子
- ④ どんぐりころころお江戸には舟で行く 徳吉洋二郎
- ⑤ そうか一茶も双樹も留守か神の留守 金子 未完
- ⑥ 飛石のあしたの方に石榴熟る 田村 隆雄
- ⑦ 秋霖や切つ先句う陣屋跡 木之下みゆき
- ⑧ 破れ柘榴ひねくれ一茶これにあり 平岡 育也
- ⑨ 一茶の碑彫を深める秋の雨 矢野 忠男
- ⑩ 陣屋前胡桃の部屋が空いている 小林 実
- ⑪ 変節に似たり渋柿渋をぬく 藤井 遥
- ⑫ 生年月日は小声双樹庵晩秋 増田 元子
- ⑬ 句碑の文字やさしく流れ柘榴の実 笈沼 早苗
- ⑭ 晩秋の張りつめている手水鉢 保坂 末子
- ⑮ 燈火親し腹べこ一茶を待つ双樹 高木 一恵
- ⑯ 雨粒の過去は問わない萩の庵 尾上 康子
- ⑰ 枯山水一糸の水にひそむ秋 北川 昭久
- ⑱ 下総に敗れし浪士鳥渡る 高橋 健文
- ⑲ 杜鵑草さんわり雨の班を散らす 久野 康子
- ⑳ 箒目に落葉許して双樹亭 倉岡 けい

(現代俳句千葉一二七号より)

「鳴俳句会」代表に高橋道子氏就任

「鳴俳句会」は、昨年十一月同人会総会において、井上信子氏の後任として高橋道子選者が選任され「鳴俳句会」代表に就任された。

(編集部着書簡より)

俳人協会千葉県支部秋季吟行会

俳人協会千葉県支部主催の第二十二回秋季吟行会が、平成二十九年十月三十一日(火) 県立青葉の森公園を吟行地に、千葉市ハーモニープラザ(千葉市中央区)で開催された。秋の長雨が続いてきたが、当日は穏やかな秋日の下、一三三名(二二六句)が参集した。

十三時望月百代幹事の司会で開会。増成栗人支部長の挨拶に続き、菅谷たけし副支部長の「『沖』と俳句と私と」の講演。いつも変らぬ九十四歳のお元気な下鉢清子顧問の講評に感激。十六時四十分、村上喜代子副支部長の閉会の辞で終了。

- ① 榎の実のほろほろ上総日和なり 増成 栗人
- ② 古墳てふ秋風の濃き処かな 伊藤 素広
- ③ くすの風けやきの風や秋深む 飯田 晴
- ④ 木の実降る古墳の丘の日だまりに 古在 路子
- ⑤ 十月も終りの雲の流れかな 前澤 宏光
- ⑥ 倒木に生きる力や冬初め 征谷喜代子
- ⑦ 秋惜む地球の丘に腰掛けて 佳田 翡翠
- ⑧ 彫刻の鳥ゐる水の澄みにけり 中山 和子
- ⑨ 枯蟻蟬父の顔容してをりぬ 金子日出子
- ⑩ 一つあり一つの色の返り花 丸澤 孝子
- ⑪ ひと雨に野は未枯れを急ぎをり 原 瞳子
- ⑫ 冬近き銀杏大樹の力瘤 原 瞳子
- ⑬ 吹くものは吹いて明日より十一月 内海 良太
- ⑭ 行く秋の日がさらさらと墳ひとつ 横尾かなな
- ⑮ 風掴むことに長けたる芒の穂 大久保文夫

(川合憲子記)

第七十回記念館山市文化祭俳句大会

(平成二十九年十一月一日開催)

昭和二十三年に発足したこの俳句大会は、館山のみならず安房地域の俳人が結集し七十年の歴史を刻んできました。第二十回から五十二回までは全国俳壇の著名な講師陣を毎年招き盛大に行われてきました。林翔、柴田白葉女、鈴木真砂女、有働亨、能村登四郎等々の各氏が並ぶ。その後、講師の招聘は中断していましたが、七十回を記念して能村研三会長を招き講演を行いました。兼題投句者一〇四名、俳句大会には七十余名が参加しました。

演題は「師弟水脈―登四郎の弟子たち―」。林翔、坂巻純子、福永耕二、遠藤真砂明、今瀬剛一、大牧広、中原道夫、正木ゆう子等各氏の俳句を紹介し、登四郎氏との交わり、研三氏との交遊を臨場感たつぷりに、エピソードを交え語り飽きさせませんでした。大会終了後には能村会長を囲み三十名が集まり、館山市俳句連盟(庄司風樹会長)主催の懇親会が行われました。

大会成績

兼題

一位(市長賞)

祭り髪きりりと少女陽をはじき

沖村 菊江

二位(教育長賞)

磴百の宙より揉み来大神輿

伊藤よし江

三位(房日新聞社賞)

萩括り風も括つてしまひけり

鈴木 滋子

席題(〇内は順位)

① 木枯や立ちこぎをする女学生

朝生 昭子

- ② 木枯をオーケストラのやうに聞く 庄司 泰雄
- ③ 今生の今が天寿か芒波 小澤 繁雄

(石崎和夫記)

第六十三回流山市文化祭参加俳句大会

流山俳句協会(会長北川昭久)は、平成二十九年流山市文化祭に参加し、十一月四日(土)流山市生涯学習センターで俳句大会を行った。

一、第十五回流山市少年少女俳句大会表彰式

小学校十六校(二〇六八名・四六七八句)、中学校九校(二七六〇名・六一七九句)から一万句を超える応募があり、入賞者が決まった。

- ① 市長賞 ② 市議会議長賞 ③ 教育長賞までを掲載。小学生の部

- ① 富士登山笑顔が消えた八合目 吉崎 泰成
- ② 野馬追いの風を切る旗大音量 石井 和彩
- ③ うち水も五分でかわく午後三時 里川 香穂

- ① 雁渡る変ることない空の道 鈴木 海仁
- ② 風鈴が重い空気をやわらげる 北原 咲笑
- ③ ころころと石のささやき山清水 牧田 健

- 二、一般の部 ① 市長賞 ② 市議会議長賞 ③ 教育長賞 ④ 文化協会会長賞 ⑤ 俳句協会会長賞までを掲載。
- ① 聞き役に徹して夫と栗を剥く 天田美恵子
- ② おのれより濃き影おとす黒揚羽 吉良 省三
- ③ きらきらと受賞の子らや菊日和 徳永 政代
- ④ 農止める友の添書き今年米 小野 正之
- ⑤ 戦なき国の新米輝けり 浪岡 郁子

(流山俳句協会 小泉欣也報)

第六十四回柏市文化祭俳句大会

柏市俳句連盟・柏市文化祭実行委員会主催の文化祭俳句大会は、十一月十一日柏市中央公民館において、九十五名の参加を得て盛大に執り行われた。上位入賞者の代表句は次の通り。

招待選者・会長・顧問選(敬称略) 天賞作品 実羽 繁選

爽やかや空手少女の深き礼 弦巻喜久子

秋尾 敏選 散骨か樹木葬かと秋日和 大園 智子

鳴戸奈菜選 日向ぼこ時計を逆に廻はしつづ 伊藤 正博

北川昭久選 小春日の遊行柳に遊びけり 渡部 和秋

藤岡貞夫選 人は老ゆ地も老ゆ秋天青すぎる 椎名 鳳人

松田雄姿選 一筋に一世を生きて文化の日 根岸 馨

互選三句合点代表句と入選者(〇内は順位) ① りんご噛む宇宙は丸いものばかり 岡田 淑子

② 諍ひを猫が取り持つ夜寒かな 日岡 育夫

③ 何も無き小春日和の駐在所 笹木 弘

④ コキと鳴る肩や木枯一号来 実羽 繁

⑤ 桶一つ洗ひ直して冬に入る 佐藤知嘉子

⑥ 利根運河鯨のような冬が来た 松澤 龍一

⑦ 散骨か樹木葬かと秋日和 大園 智子

⑧ 過去と言ふ苦き腸秋刀魚焼く 田辺ゆかり

⑨ 冬の蝶見知らぬ町の息づかひ 倉持 梨恵

⑩ 自転車に空気がたつぷり天高し 豊島 京子

(柏市俳句連盟 鈴木一三報)

結社賞

平成二十九年「好日」三賞

好日賞 大塚功子・中嶋三雄

老幹の穴ぼこといふ春の關

余生とはきつと青春初蛙

青雲賞 寺内由美

ノックしてみたき樺の巣箱かな

同佳作 上田恵子・川俣婦美子

白雲賞 該当者なし

(「好日」平成二十九年十一月号より)

平成二十九年「獺祭」各賞

獺祭賞 吉村昭雄

風光る城に神の名仏の名

昭雄

同賞秀逸 岡本美美・藤原照子・鈴木多津子
新人賞 青木志津

岐阜蝶の足元に来て紋広げ

同賞秀逸 江尻明子・仲井洋子

(「獺祭」平成二十九年十一月・十二月号より)

平成二十九年「浮巢賞」

浮巢賞(第二十二回) 北原みどり・足立敬子

裏山へ読経流るる施餓鬼寺

荒神の遺跡に低き稲架並ぶ

浮巢新人賞 該当者なし

(「浮巢」一月号より)

平成三十年「結社賞」

沖賞(第四十六回) 楠原幹子

満開のさくら樹液の熱からむ

幹子

珊瑚賞(第四十回) 栗原公子

全力のつもり私とかたつむり

新人賞(第四十六回) 該当者なし

新人奨励賞(第四十六回) 榎本秀治・須賀ゆかり

(「沖」一月号より)

第二十八回「川」結社賞

川賞一位 菅田裕子

山門の朽ちて木屋金と銀

川賞二位 宮川田鶴子

溪流賞一位 森本知美・目美規子

秋刀魚買ふ佐藤春夫の青春と

満開の花に埋りて廃れ宿

平成二十九年「野火」三賞

野火賞 梅沢 弘

日のひかり散らかつてゐる春の水

新人賞 小池和利

短日や靴履き終へて鳴る電話

(「野火」一月号より) 和利

ひろば

県内吟行地紹介

成東の冬苺

山武市の温室育ちの箱入り娘、成東の冬苺。苺狩の吟行が楽しめます。

圏央道を山武成東インターで降り、市内中心部で突き当たる国道一二六号を北上すると、苺の直売所や苺狩の看板が目立つようになります。そこは通称ストロベリーロードと呼ばれ、千葉県内屈指の苺狩スポットとなっています。一月はじめ頃から五月の連休過ぎ頃まで、昼はたくさんのお客でにぎわい、夜はピニールハウスの灯りが静寂を見守ります。

平成二十九年から仲間入りしました千葉県オ

リジナルの品種「チーバベリー」は、果実が大粒で甘く、程よい酸味が特長です。ぜひご賞味ください。なお、苺は先端に行くほど糖度が増すので、ヘタの方から先端に向かって食べるのがおいしく食べる秘訣ということです。

苺でお腹をいっぱい満たした後は、歌人であり小説『野菊の墓』を発表した伊藤左千夫の生家までひと足伸ばしてみるのはいかがでしょう。生家には歴史民俗資料館(山武市殿台三四三番地二)が併設され、伊藤左千夫の師である正岡子規、地元のお友である藤真、大きな影響を与えた斎藤茂吉や土屋文明との交流をうかがい知ることが出来ます。

(「沖」会員 稗田寿明記)

新入会員一句

木の実落ち太古の詩歌はじまりぬ
たましいを華とおもえば霰ふる
月代や糸糸は水の光持ち
伊能図のままの岬を鳥渡る
ぬきんでて伸びしろ未完今年竹
温石やその後の大石内蔵助
黒潮は海の街道鯨来る
透明な空降りて来る寝釈迎かな
ふつふつとケトルの和音小鳥くる

稗田 寿明
清水 伶
小見 恭子
関戸 信治
田辺ゆかり
木村 傘休
栗坪 和子
鈴木 英子
相馬詩美子

追悼 益田 清 先生

三苦 知夫

去る十月二十三日、顧問・益田清先生が逝去された。享年九十歳。

北九州市で出生。横山白虹（自鳴鐘）主宰、第二現代俳句協会会長）を生涯の師とした。

昭和23年「自鳴鐘」復刊と共に入会、自鳴鐘賞二回、初代編集長、同人会会長を歴任

風が胎みし馬か青野を馳せきたる 清

24年 毎日新聞社主催・全日本観光俳句大会で毎日新聞社賞を受賞（22歳）

31年 同人誌「未来派」を創刊

34年 全九州各派に呼び掛けて「九州俳句作家協会」を設立、俳誌「九州俳句」を創刊

45年 新日鐵の転勤で君津市に転入

さわやかに海透き育つ炉中の鉄 清

46年 第一回千葉県俳句大会で県知事賞を受賞

47年 「君津俳句会」を創立、「きみささづ」を創刊（であい・ふれあい・ひびきあい・みんなの個性をみがきあい）の四あいをモットーとした。

千葉県現代俳句協会会長と千葉県俳句作家協会会長を、夫々二期務めた。

のぼりつめ風を見ているかたつむり 清

現代俳句協会会長離任時の大会で県知事賞受賞

終生、緑夫人を熱愛し、「永遠の抒情詩人」に相応しい人生を全うされた。 合掌

会員著書紹介

●句集『歲月』

松田雄姿 著

大串章主宰「百鳥」同人である著者の第四句集。平成十五年から二十七年までの作品三三八句を収載。昭和九年熊本県生れ、柏市在住。

昭和四十九年「濱」入会。「濱賞」受賞。平成六年「百鳥」創刊に参画、二十七年まで同人会長を務める。第三回鳳声賞受賞（百鳥同人賞）。雪を抱く峰嶂の表紙が、重厚な歲月と著者を彷彿とさせる。俳人協会会員。柏市俳句連盟顧問。

百疊の窓に富士ある爽気かな

遠祖は一領具足植田守る

一山の涼一瀑を源に

これよりの未知の八十路や初山河

（平成29年2月発行・ふらんす堂）

●季語の思い出

中山和子 著

「初蝶」代表のエッセイ集。「初蝶」誌に平成二十四年七月号から二十八年十一月号まで掲載された四十九篇のエッセイを纏められたものである。あとがきによると、四十九篇という半端の数になったのは、田部谷繁編集長急逝により筆を折ったとのこと。平成十七年千葉市生れ、同市在住。昭和六十一年「初蝶」入会。平成二十九年小笠原和男主宰逝去により代表就任。

「ろんど」主宰すぎ巴里氏が温かい前書を寄せる軽妙な筆致で綴る一集。俳人協会会員、俳人協会千葉県支部幹事、句集『分類顔』。

（平成29年4月発行・私家版）

●句集『小林愛子集』

小林愛子 著

（自註現代俳句シリーズ・12期22）

「万象」副主宰である著者の自選三〇〇句に自註を付した一書。昭和五十一年から平成二十八年の作品を、句集「阿夫利」「辻楽師」とその後の作品から厳選し収載。新潟県生れ、横浜市在住。

昭和五十一年「風」入会。「風」賞受賞、「風」六〇〇号記念賞（文章）受賞。平成十四年「万象」同人参加。本書は「万象」創刊十五周年を迎えた節目の年の刊行となった充実集。俳人協会会員。夫逝きて芙蓉の紅の極まれり

桃たる色街奥の一遍寺

髻しろき弟と来て墓洗ふ

故郷をかなたに墓標鳥雲に

（平成29年8月発行・俳人協会）

●句集『松田雄姿集』

松田雄姿 著

（自註現代俳句シリーズ・12期24）

句集『歲月』の著者、自選三〇〇句に自註を付した一書。昭和四十九年から平成二十七年の作品を、句集「矢筈」「はたした神」「鶴唳」「歲月」から精選し、俳誌「濱」からの数句を加え収載。

四十歳から八十一歳迄の半生史。百鳥叢書第九十九篇。日本吟道俳壇選者、著書『大野林火言行私録』。

耕して田守雲雀を喜ばす

将門の馬駆りし地ぞ野火走る

流星天の剥落夜もすがら

竜天に真白き滝を脱ぎ捨てて

（平成29年10月発行・俳人協会）

●句集『葛根湯』 佐藤映二 著

「岳」の同人会長、当協会理事を務める著者の第三句集。平成二十二年から二十九年までの作品三三二句を収録。昭和十二年福島県生れ、松戸市在住。六十三年「鷹」入会。平成元年「岳」に入会。「岳・前山賞」を受賞。現代俳句協会理事、宮沢賢治研究会顧問としても活躍中。

宮坂静生「岳」主宰が懇切な帯文を寄せる。日本文藝家協会会員、著書『宮沢賢治交響する魂』、句集『羅須地人』『わが海図・賢治』。

福島はわが臍の緒よがり笛
夜つびての怒濤のかたち枯尾花
葛根湯効きし夜長のトーマス・マン
鮭獲れぬ日はユーカラを舟の上
(平成29年10月発行・現代俳句協会)

受贈誌より(前号続き)

原人(一月号) 結び目のもつとも緩き冬の虹 昼間たつお
玄瀟(三十四号) はるばると玄火玄瀟去年今年 森 章
源流(三十四号) 波瀾万丈の十月遂に消えゆけり 小出 治重
鴻(一月号) 黄落の明るき黙を作りけり 増成 栗人
好日(二月号) 冤罪の猫撫でてゐるクリスマス 長峰 栗人
雑草(一月号) 冷笑と言うべし石路の夕光^かは 実初 繁
鳴(二月号) 喪^くころの去らぬ湯豆腐掬ひけり 高橋 道子
軸(一月号) 水底の青さとなつて初明り 秋尾 敏

新暦(三八四号)

どの鉢も小さい秋よ野草展
瀬祭(一月号) 初空や威容ゆるがぬ富士はるか 中路 素童
夏日(三三二号) 美しき冬来る橋のあたりより 本田 攝子

野火(一月号) 賢治の川啄木の山冬日差す 望月 百代
初蝶(二月号) 傾いて未だ現役なる案山子 菅野 孝夫

半島(二月号) 逝きしかと電話に縋り寒くいる 中山 和子
万象(二月号) 丹田の力抜きたる捨案山子 武田 和郎

百鳥(一月号) 木の葉散り散る楸邸の声聞こゆ 内海 良太
悠(十月号・十一月号合併号) ほのぼのと高さが色にさるすべり 大串 章

遊牧(一一三号) 生きてゆくための沈黙冬の虹 水見 壽男
ろんど(一月号) 澄む秋や秒針銀の音放つ 塩野谷 仁

すずき巴里

★会員各位

本号に会費納入の振込用紙を同封しましたので、お早目の納入をお願い致します。年会費は前納になっています。皆様のご協力をお願い申し上げます。
(個人別会費納入状況のお知らせは追って「真木」に同封致します。)

事務局日誌

◆第四回理事会(出席者二十六名)

日時 11月16日(木) 14時から16時
会場 千葉市「ホテルプラザ菜の花」
議事 1 平成29年度吟行会報告及び反省
2 第59回千葉俳句大会報告及び反省
3 第3回千葉俳句大会報告及び反省
4 第32回協会賞について
5 俳句大賞贈賞式・新春交流俳句大会・祝賀会について
6 会報「真木」一八四号について
7 事務局報告、その他

会員異動
新会員

稗田 寿明(佐倉市) 清水 伶(市原市)
関戸 信治(東京都) 小見 恭子(佐倉市)
田辺ゆかり(柏市) 木村 傘休(市原市)
栗坪 和子(市川市) 相馬詩美子(千葉市)
鈴木 英子(千葉市)

謹計

村山さとし 今留 治子 福川 政美
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

今号は会長の巻頭言、俳句大賞に関する一連の記事、新春交流会等を主にお伝え致しました。次号は協会賞の発表及び受賞作品を紹介いたします。なお、故村山さとし・今留治子両顧問の多大な貢献に感謝し詳細を次号に掲載させていただきます。(紀)

千葉県俳句作家協会 祝45周年

月刊俳誌

沖(おき)

俳句ルネッサンス

主 宰 能村 研三

新会員募集中

誌代 1年/15,600円
半年/7,800円

見本誌 1冊 800円

沖 発行所
〒272-0021 市川市八幡6-16-19
TEL 047-334-4975
FAX 047-333-3051
振替 00170-6-161552

創刊 50周年

軸

軸 俳句会

主 宰 秋尾 敏

〒278-0005
野田市宮崎95-4
電話 04-7122-3921
Fax 050-5552-9110
82円切手3枚で見本誌贈呈

創刊二十五周年
俳句文芸の真・新・深を志す

ろんど

創刊 鳥居おさむ
主宰 すぎき巴里

誌代 一年 二二〇〇円

〒262-0042 千葉市花見川区花島町四三二一〇

ろんど 発行所

電話・FAX 〇四三二二五八〇一一一
本部〒167-0023 東京都杉並区上井草二二二八二二
振替 〇〇一五〇九七〇二二一〇七

俳誌

あびこ

誌代(隔月刊) 一年 四〇〇〇円

〒270-1138 我孫子市下ヶ戸二八五

TEL 〇四一七二八二一四四四一

郵振替 〇〇一〇〇一四一八八九〇七四

あびこ俳句同好会

主 宰 染谷 卓

一度きりの今を楽しむ

いには

INWA

主 宰 村上喜代子

新会員歓迎・添削指導します。

誌代 1年 12,000円(月刊)
半年 6,000円 見本誌 500円

— いには俳句会 —

〒276-0036
千葉県八千代市高津 390-211
電話 047-458-1919
Fax 047-458-1895
振替 00280-9-131469
HP検索：いには俳句会

現代俳句同人誌 師系 金子兜太

遊 牧

代表 塩野谷 仁

同人費 一年 二〇〇〇〇円
誌友費 一年 六〇〇〇円

〒273-0033 船橋市本郷町五〇七一二二二二〇七

遊牧俳句会

電 話 〇四七二三六一〇八一
FAX 〇四七三三二一五七七三八

心を満たす俳句

鴻koh

「鴻」俳句会

発行所 〒271-0087 松戸市三矢小台二四一六谷口方
電話 〇四七三三六三四五〇八
FAX 〇四七三三六六一五一〇〇

◆誌代/年間 二二,〇〇〇円



主 宰 増成栗人
師系 角川源義 吉田鴻司

創刊 昭和23年

原人

伝統俳句に現代の詩情を

名誉主宰 三枝 青雲
主 宰 昼間たつお

誌代 一年 一二,〇〇〇円

発行所 原人社

〒260-0824 千葉市中央区浜野町四〇七十六
TEL/FAX 〇四三一六五四三三三
振替口座番号 〇〇一七〇一四一六四八五九七

人間の総量を

鳴

創刊 田中午次郎
再刊 伊藤白潮
選者 高橋道子

誌代 一ヶ月 一,〇〇〇円(送料共)
一年 一二,〇〇〇円

〒277-0827 柏市松葉町四一七二一三〇五
荒木甫方 鳴 発行所

電話 〇四一七二二三一七六三二
振替 〇〇一八〇一四一六一五七二二

<http://shigr-haikukai.com/>